

ヴォルテールの小説

—— エミール・ファゲ「ヴォルテール」を中心として ——

(一)

松 尾 正 路

ヴォルテールの小説を小説と呼ぶことができるならば、彼の小説類のすべては、思想化された小説、または、小説化された思想である。人物も筋も、ヴォルテールといふ思想家の思想に實驗されながら動き操られてゐる。小説の主人は、作品の主人公ではなく、つねに、明瞭に、作者の思想、ヴォルテール自身である。

哲学小説や思想小説の弱點は、哲学や思想が小説に先行し、人物の運命がすでに指示され、豫知される點にある。人物が具象性を帯びた獨立した人間として描かれてゐるかどうかといふことは別である。この種の寓話小説では、人物は最初から、抽象化された符號、もしくは戯畫にすぎないからである。したがつて、作品の成功と不成功は、一途に、思想表現の小説的技術にかゝつてゐる。タンポポの實をはこぶ冠毛が微風に乗つて舞ふときのやうに、小説が思想の風にうまく乗つて、あたかも、自分の力で飛翔してゐるかのやうに軽やかに、自由に見えるときに成功してゐる。われわれは、そこで、タンポポの冠毛が飛ぶのを見ながら風を忘れてゐるやうに、思想を忘れることができる。そして、この場合、思想は、もはや思想ではなくなつてゐる。藝術に吸収され、藝術の糧となつて消化された思想

は、思想の論理を失つてゐるからである。眞に優れた思想小説が、その論理や抽象性にかゝはらず、かならず、論理を超えた、不明確な、象徴的な性質を持つてゐるのは、そのためである。思想小説が失敗するのは、思想がこのやうな文学の冠毛に恵まれず、無器用な骨組だけを曝してゐる場合である。

ヴォルテールが書き残した歴史、演劇、哲学、評論、書簡などの總量に比較すれば、二十に餘る短い彼の小説類は、極めて僅かなものであるが、この僅かな作品のなかでも、今日一般に知られてゐる作品は、殆ど二、三を算へるにすぎない。ロツクの崇拜やニュートンの紹介に捧げた熱情、そして、「ルキ十四世時代の歴史」や「哲学辭典」のために消されたエネルギー、また特に、死の間際に至るまで彼の野望名聲の據り所となつた演劇に比較すれば、小説の類は、ヴォルテール自身にとつても二次的な餘技にすぎなかつたやうに思はれる。しかるに、今日、誰が、ヴォルテールのニュトンや「哲学辭典」を讀み学ぶであらうか。誰が、彼の演劇に一瞥をさへ與へるだらうか。哲學家はヴォルテールの存在を無視することができらう。ラシイヌやコルネイユの不朽の功績の前に、彼の演劇は殆ど何ものをも加へてはゐない。しかるに、彼の小説「キャンディッド」や「ザディグ」は今日なほ、讀むに堪える名文として、ヴォルテールの名聲を支へてゐるものである。これは、どういふ意味だらうか。

まづ、ヴォルテールは、その僅かな小説類の他に、そもそも何によつて、彼の時代においても、その後においても、かくまで有名であるか、といふ問題である。モンテスキウの「法の精神」やルウソオの「エミール」のやうに、ヴォルテールの思想の根幹を示す代表的な著述といふものがないため、われわれは彼の名聲と功績の根據を求めるとに苦しむのであるが、エミール・ファゲの酷評によれば、次のやうに説明される。

「ヴォルテールは、生前死後ともに、かつて何人も見たことがないほど大きな文学的成功をおさめた。彼はその時代のヨーロッパで最も偉大な詩人だと思はれた。これは驚くべきことであり、ヴォルテールにとつては幸せなこと

あつたが、事實さうだつたのである。そして彼は、最も偉大な哲学者とは考へられなかつたかも知れないが、大部分の人からは、深遠大膽な哲学者と思はれてゐた。そして、悪行や善行のお蔭も手傳つて、民衆の人気さへ獲得するほどの巧者であつた。……

ヴォルテールの思想が最も好んだ革命とは正に正反對な革命も、彼の光榮を傷つけなかつたばかりでなく、何故か私にもよくわからないが、却つてその光を増してゐる。フランス人が行つたといふよりも、むしろ蒙つたといふべき民主的、非文学的、非藝術的、非經濟的なこの革命のすべてのなかで、フランス人が最も好んだのは、それが非宗教的だつたことである。そして、ヴォルテールは非宗教的であつた。しかも彼は、彼が輕蔑したと思はれるこの革命から、勝利者のごとく脱け出してゐるのである。即ち、その後、ヴォルテールとは無關係に、むしろ對立して行はれた文学革命さへも、彼に奉仕した。ロマン主義者たちは、あの輕率で、やゝ無知な熱情にかられ、フランスの古典文学を攻撃したが、不肖にせよ、古典文学の後継者であつたヴォルテールが、この攻撃陣の代表者として最大の支持と人氣を博したのである。ロマン主義者たちにとつて、ヴォルテールは古典時代に最も近接してゐたからである。……かくして、彼は、レストラシオンと七月政權の全期間ならびに第二帝政時代さへも、味方の陣營の最中を通過するがごとく通り抜けたのである……

すべて、大きな量の塊は、それだけでも威嚴を持つてゐる。感嘆するだけで讀まなくても間に合ふ國では、いかに多くの批評家たちが、僅か數冊の書物を讀んで叫んだか、「まだ五十冊がある。いつでも五十冊が残つてゐる！何と夥しい思想の活躍！何と豊富な知識！何たる探究！何と多くの問題の提起と解決！」かういふ叫び聲は抑へつけなければならぬ。ヴォルテールの著述全體に目を通してみればわかる。この百科辭典の中には、ほんの僅かな思想と、僅かな問題があるだけである。ディドロにはもつと多くのものがある。サント・ブーヴには遙に多くのものがある。

ヴォルテールほど繰返しの多い人はない。彼の哲学書、宗教批判、特に宗教史や文学論さへも、様々な表題の下に十度繰返さずに書かれたものはない。しかも、これらの繰返しが、次には書簡の中に現れるのである。彼は、ある種類の決つた、お得意の諧謔さへ持つてゐた。インデックスを作つてみるがよい。おそらく、彼の著述のなかで同じ諧謔に百度もお目にかゝるだらう。要するに、ヴォルテールは、極めて事情に精通した知的な通人にすぎず、反應の敏い、しかも長生きをして一日に二頁——驚歎するほどではないが、なかなかの量である——を書くことができた人である。」

このやうに、エミール・ファガがヴォルテールを取扱つた場合ほど文学史上の人物を徹底的に酷評した例は稀である。ファガの批評を浴びたヴォルテールの正體は、時流に投じた聰明狡猾な、そして幸運な山師にすぎない。文人でありながら王侯貴族の前に諂らひ、弱者に厳しく、理財に長じ、豪華な館と領地まで手に入れた彼は、十八世紀の半貴族」である、とファガはいふ。したがつて、名聲の野心と卑俗な利己主義を身につけたこの思想家にとつては、公衆の感激や拍手の嵐により、自己の天才が目前に證明され確認される演劇こそ重要な意味を持つてゐたが、小説の類にいたつては、無に等しい。

「ヴォルテールにとつて、一つの小説なるものが何の意味を持つてゐるだらう？それは、主人公が作者自身である談話にすぎない。爐邊に肘をついて家の主人が巧みに喋る一口話であつて、興味の中心は、話題の人物でもなく、話の筋でもない。意見の發表や枝葉の論議や故意や悪意である。ヴォルテールは英國の小説を好まなかつたが、すべて小説といふものが好きではなかつた。當然なことである。眞の小説家は、街路で見つけた一人物の歩き方に興味を感じる。生涯その人物の後を追ひ、彼の考へ方や感じ方がどんなふうであるかを他の人たちに物語る特異な人々である。しかるにヴォルテールは、かういふ觀察の趣味をまつたく持たなかつた。ヴォルテールが好んだのは、ヴォルテ

ール氏自身の諷刺的な意地悪い思想を喜ばせる小話の類なのである。」

「ヴォルテールの小説は、様々な冒険を通して表明され認識される一つの思想である。それは、「哲学辭典」の演繹ではなく、物語られた「哲学辭典」である。」

フアゲによれば、ヴォルテールの小説は、單に餘戯であつたばかりでなく、思想を物語風に配置したものにすぎない。即ち、小説化されることによつてのみ眞の思想たり得た思想ではない。また、したがつて、純粹な意味における思想の自敘傳でもない。多分に自己宣傳的な意圖を持つた思想發表の手段にすぎない。自ら思想の風に飛翔するタンポポの冠毛などは何處にもないのである。果してさうであらうか？

もしヴォルテールの小説が、眞の小説でもなく、眞の思想でもないとするれば、彼の「哲学辭典」もまた彼の全存在の演繹としての哲学、即ち、眞の哲学ではないことになる。彼の歴史も、彼の科学も同様であらう。實にその通りである、といふのがフアゲのヴォルテール論である。されば、ヴォルテールの名聲の祕密は、たゞ彼がこのやうな哲学や科学や文学のなかで、最も幸運な矛盾と、最もフランス的な精神の傾向と趣味を發揮したことにある。

「知的であるよりも才氣的であり、藝術的であるよりも遙に知的である。それがフランス人である。實際的な優れた良識家であり、敏捷な即答家であり、闊達鋭利な文筆の所有者であるが、重大な問題にぶつかると大きな矛盾を曝露する。それがフランス人である。一寸した軽い束縛にも堪へられないが、最も重い束縛には調子を合せることができる。それがフランス人である。自分では改革者のごとく信じながら、骨の髄まで保主的であり、文学や藝術においては、不敬の快味を愉しむことが許される限り、傳統に強く結びついてゐる。それがフランス人である。——ヴォルテールは軽く、快斷的であり、戰鬥的である。それがフランス人である。彼は、すくなくとも、精神において誠實である。彼のあらゆる缺點も、術学と偽瞞だけはまぬかれてゐる。即ちフランス人である。彼は、殆ど形而上学と詩の

才質に缺けてゐる。それがフランス人である。彼は、韻文と散文のなかでは、洗練された魅力を持ち、時には勇辯でもある。それがフランス人である。彼は、根本的に、自由の觀念を理解することができない。意地悪く壓へつけられてゐるか、得意になつて壓へつけるかである。それがフランス人である。心中は専制家であり、國家の進歩と聰明な救世主を期待してゐる。即ちフランス人である。ヴォルテールは餘り勇敢ではない。この點だけはフランス人ではないが、しかし、フランス人は、すでに、その他の場所で、ヴォルテールの裡に餘り多くの共通點を見出してゐるので、この缺陷を勘辨してゐる。」

フランス人の一般的な特徴とヴォルテールの才質をこれほど適切に組合せた文章は他に見られないと思ふが、すべてファゲの筆に描かれるヴォルテールの名聲は、その名聲に價するものの上に置かれてゐるのではなく、むしろ一般社會の通俗性に結ばれた相對的な意味しか持たない。しかし、「藝術的であるよりも遙に知的であり」、「軽く、決斷的であり」、「形而上學と詩の才質」を缺くにせよ、すべてこれらの一般的な共通性にもかゝはらず、フランスの社會に、無數のヴォルテールが存在したのではなく、ヴォルテールたり得たのは、たゞ一人ヴォルテールだけであつたといふことは、何を意味するのであらう。一般の典型たり得るためには、一般的であり、通俗的であることだけでは不可能である。ファゲは、ヴォルテールの天才を見落してゐる。例へば、次のサチールを、ヴォルテールの天才なしに書くことは、いかなる通俗人にとつても不可能である。「神の御慈悲によつて、オーヴェルニュはクレルモンの大修道院の一説教師兼臺所人たるキャブシン僧レスカルボチエ師の蝸牛」といふ一文である。

「レスカルボチエ神父が、神學博士のカルメル派の僧エリイ神父に書いて曰ク「神父様、先頃までは、ジェジュエイトの話より他には耳にいたしませんでしたが、此頃は蝸牛の話ばかりでございます。何事にも時期があるのでございませう。とは申しますものゝ、蝸牛は私どものどんな宗教よりもながつづきがするのではございませうか。な

ぜかと申しますに、もし、キャプシル僧やカルメル僧たちの頭を悉くチョン切りました場合には、もはや新しい修業者も絶えて無くなりませうに、蝸牛はたとへ首を切りましても、一ヶ月たてば、また新しく首が生へるのでございます。現に、五月の二十七日、午前九時頃、天気は晴天、愚僧は蝦茶色の裸の蛞蝓二十四匹と殻のついた蝸牛十一匹の頭を、四つの觸角もろとも、全部チョン切りました。それからまた、八匹の蝸牛の頭を觸角の間からチョン切りました。十五日経過いたしますと、二匹の蛞蝓が新しい頭を見せ、はや食物を食べ、四つの觸角さへ出揃ひはじめました。……

愚僧は、この事實をしばしば説教のなかにとりあげて話しましたが、御自身の首を切られながら、その首を腕にかゝへ、やさしく接吻しながら二里も歩かれたといふ聖ドニに比較するばかりでございました。とは申すものゝ、聖ドニのお話が神学上の眞理といたしますれば、蝸牛の話は科学上の眞理でございまして、何人の目にも確かめられる明白な眞理でございます。聖ドニのお話はその時一日の奇蹟でございますが、蝸牛の話は毎日の奇蹟でございます。」

ところで、蝸牛たちが頭をチョン切られてゐる間に、彼らの魂はどうなつたかといふ重大な問題に對して、カルメル派の神学博士エリイ神父は次のごとく答へる。

「貴僧が提出された問題は、少しばかり神学に目を通せば、實に最も簡單、且つ最も明瞭な事柄でござる。聖トーマがはつきり申してをられる——魂は肉體のいかなる部分にも住むものである。それは、魂の完全と特質の總和によるものであつて、徳の總和によるのではない——と。かくのごとく、魂は微妙なるが故、一匹の蚤といへども十萬の魂を宿すのでござる。したがつて、蛞蝓の頭がチョン切られるやいなや、魂は尻に逃れ、新しく頭が出来るまでそこに居るのじや。頭さへ出來れば、またそこへ戻るのじや。これほど自然、且つ當を得たることは他にござりませぬ。ひ。」

動物学上、蝸牛の脳は咽喉の部分にあるので、脳中樞を保存する咽喉を傷つけずに切斷すれば、頭の前部と觸角は再生するといはれる。實際に蝸牛を實餘したヴォルテールが、この事實を知つてゐたかどうかは、こゝでは問題にならない。根本的には形而上学を否定することができなかつたとはいへ、十八世紀の實證主義、即ち、「百科辭典」精神は、明かにこの短文に現れてゐる。したがつて、このやうなヴォルテールの實證精神が、彼の他の作品のなかで矛盾を露呈してゐるとはいへ、カトリシスムに反逆した彼の存在理由レゾン・デートルと誠實は、そのために裏切られてはゐない。十八世紀がその多様性と矛盾を包みながら、次の來るべき時代への役割を果すことによつて、明確な性格を保持してゐたのと同様である。

蝸牛の魂に關する見解は、おそらく、「哲学辭典」の「魂」の項目に繋つてゐるだらう。ヴォルテールは此處でも、多分に魂をからかひながら扱つてゐる。たゞし、思想の實驗に引合はされる動物は犬、猫、赤ん坊、牡蠣などである。

「牡蠣の感覺能力と感覺の種類は、普通より少ないやうに思はれる。といふのは、魂が殻の方に宿つてゐるので、五つも感覺を持つ必要はないからである。しかし、二つしか感覺を持つてゐない動物も甚だ多い。われわれ人間は五感を持つてゐるが、五つとは、取るにも足りぬ數である。他の世界の他の動物は、二十ないし三十の感覺を持つてゐることも信ぜられる。また、一層よく完成した他の種の生物は、數へ切れぬ感覺を持つてゐるかも知れぬ」

この牡蠣の話とともに、聖トーマの魂の宿所に關する教へが引用されていることはいふまでもない。しかし、魂についてヴォルテールの意見を知るためには、プラトンやエジプト人や、デカルト、ガッサンデイ、マルブランシュ、ロック、ワーバトンなどを寄せ集めた上に自分の饒舌を蒔き散らした「哲学辭典」を讀通するかはりに、一片のサチール「レスカルポチエ神父の蝸牛」を讀み愉しむことを誰が躊躇するだらうか。「哲学辭典」こそ、最も下手な哲学小

説である。即ち、最も無駄の多い智識と思想のサラダである。智識を消化した思想は、彼の輕妙な一片の完結したサチールにおいて眞に思想化されてゐるのである。「百科辭典」に寄せた彼のアポロジイは、このことを最も雄辯に語つてゐる。

「ルキ十五世の召使が、私に、こんな話をしたことがある。ある日、王が、少數の人をお相手にトリアノンで食事してをられた時、たまたま、話が狩獵のことから火薬に及んだので、その中の一人が、最上の火薬は硝石と硫黄と炭を等分に用ひて造られるといつた。火薬のことではもう少し進んだ智識を持つてゐたヴァリエール侯爵は、優秀な大砲火薬は、よく濾過し、蒸發し、結晶した硝石五に對して硫黄一、炭一の割合で造られると主張した。すると、ニヴェルノア侯爵が、

——ヴェエルサイユの森で、毎日「しやこ」をうづたり、時には國境地帯で人間を殺し合つたりする私たちが、正確に何を使つて殺し合ふのかも知らずにあるとは面白いですな。といつた。

——本當にその通りでございます、とポンパドール夫人が答へた。何事についても私どもはさうなんです。たとへば、私が使つてをります頬紅が何で造られてゐるのかさへ私は知つてはをりません。もし、私の絹の靴下がどうして造られるか、などと尋ねられましたら、ほんとに困ります。

そこで、ヴァリエール侯爵は、

——陛下が「百科辭典」を禁止されたのは、まことに残念でございます、といつた。

王は、「百科辭典」の沒收について辯解された。つまり王は、宮廷の婦人たちが殆どすべて化粧臺の上に置いてゐる。ン・フォオ版二十一卷の書物が、フランス王國にとつて最も危険なものであることを知らされてゐたのである。そこで王は、この書物を許可する前に、眞相を確かめようと、食事が終るのをまつて、三名の侍童に「百科辭典」

を持參せよと命ぜられた。やがて侍童たちは、一人七巻づつ重さうに、やつと抱きかへながら、運んで來た。

「火藥」の項目を調べてみると、ヴァリエール侯爵の説が正しいことがわかつた。そして、ポンパドール夫人は、マドリツドの女たちが頬を染めるのに用ひた昔のスペイン紅と巴里の婦人が使ふ頬紅との異ひを知ることができた。さらにポンパドール夫人は、彼女の靴下がどんなふうな機械で造られるかを知り、またその機械に驚歎して叫んだ——あゝ、何といふ見事な書物でせう！陛下は王國の唯一人の學者として專有されるためにこの有益な智識の倉庫を沒收あそばされたのでせうか？——

居合せた人々は、皆こぞつて、リコメードの娘たちがユリスの寶石に吸ひ寄せられたやうに、「百科辭典」に寄り集つた。そして、各自知りたいと思ふことを即座に知ることができた。訴訟に關係した人々は、事件の明確な裁決がそこに示されてゐるのに驚き、王自身は、王權に關するすべてを讀み學ばれたのである。そして、王が言はれるのに、——何故人々はかくまでこの書物を誹謗するのか、まことに理解できぬ。——と。

——それは、この書物が餘り立派だからではございませんまいか？——とニヴェルノア侯爵が答へた。

かうして「百科辭典」が、しばしの間、人々の手に紐解かれてゐるとき、コアニイ伯爵が聲高に、——陛下、このやうな萬般の技術に通曉し、なほかつそれを後世に遺すことのできる多くの學者が陛下の御治世下に居りますのは、餘りお幸せに過ぎます……もし陛下がお望みならば、私の全財産を沒收なさるとも、「百科辭典」だけは御返し願ひます。——

すると王は、

——だが、この有益な立派の書物のなかにも非常に多くの誤りがあるといふ。

——陛下、と、コアニイ伯爵は續けていつた、唯今の陛下のお食事には、二品ほど不出來な料理がございました。私

どもは口をつけずに置きましたが、お食事は大變結構なものでございました。二品の料理が出来だからと申しまして、お食事を悉く窓から投げ捨てるには及びませぬ。

王は、成程とうなづかれた。かくて人々は各々得るところがあつたのである。それは、有益な一日だつた。

この一文は、たしかに社会の一般人を對象とした「百科辭典」の廣告文である。しかし、たしかにまたヴォルテールの文章である。そして、十八世紀の思想的ならびに社会的背景を知る者にとつては、この挿話風に語られた素描のなかに、當時の多分に技術的實證的な哲学の概念や、科学への上流社会の好奇心、かゝる十八世紀思想のなかに胚胎するものと、これに對する舊秩序の不安と恐怖、「百科辭典」の出版禁止、「百科辭典」学派の慎重な自己防衛などの活きた縮圖を見ることができらるであらう。ヴォルテールをラシヌ、コルネイユに續く最大の悲劇作家であり、十八世紀最高の詩人のごとく讃へてゐるダランベールの「百科辭典解説」と、ヴォルテールのこの短文と、いづれがよく「百科辭典」ならびにヴォルテール自身を語つてゐるだらうか？

(二)

「そのまゝの世界」または「バブークの觀想」

この十頁ほどの短文は、「ザディグ」と同様、ヴォルテールがポンパドール夫人やアルヂヤンソンの庇護によつてフランス宮廷に迎へられ、他方、プロシヤ王フレデリック二世の招聘、シヤトレ夫人との情愛と研究の共同生活など、やがて恐るべき嵐の原因となるべき時期ではあつたが、おそらく、ヴォルテールが未だ人間と社会に對してあの痛烈な皮肉を感得する前の、相對的には最も平穩な自負心に充ちた年代に書かれたものであらう。

まづ、常套手段として、善良無垢な探訪者が、ヴォルテールの書齋から派遣される。小説のなかではバブークと呼

ばれ、彼を派遣するのは、小アジア區域を管轄する神々の一人イチュリエルである。派遣の目的は、ペルシヤ人の亂行狼藉ぶりが度を過ぐすので、首都ペルセポリスを罰するか、全滅させるか、その實態調査である。ペルセポリスに着いた特派員ブークは、そこに善惡美醜が構成する人間社会の不思議な調和を發見し、世界をして歩くがまゝにまかせよ、といふ結論に到達する。そしてこの結論が、暗い絶望の諦觀から發した世界の再認識ではなく、矛盾を善しとする十八世紀の樂觀主義であることはいふまでもない。ヴォルテールは、この間、すでにパスカル攻撃の論陣を張つてゐたことを思ひ出す必要がある。

特派員ブークが最初に目撃したのは、ペルシヤ軍とインド軍の闘ひである。彼はそこに戦争の悲惨と愚劣さを見る。何のために戦争してゐるのか、と一人の兵卒にたづねる。——そんなことがどうして私なんぞに解りますかい、——と兵卒が答へる。指揮官の將校も知らない。知つてゐるのは國家の戦争責任者たちだけである。その責任者たる味方の大臣も敵の大臣も、人類の幸福のために闘つてゐるのだと主張する。そして、それを主張する度毎に、都市や村が破壊される。

ヴォルテールはこのことを「無智なる哲學者」のなかに述べてゐる。

「最大の罪惡は、すくなくとも最も破壊的な、したがつて最も自然の目的に反する罪惡は、戦争である。しかし、いかなる戦争挑發者も、何らかの正義の口實をもつてこの大罪を着色せぬ者はない。」

「最も不正な殺戮行爲が提案される國家の會議の席上では決して「不正」(injustice)といふ言葉は用ひられない。血に飢へた最も殘虐な共謀者も、罪惡を犯さう、とは言はない。彼らは例外なしに、祖國の爲に暴君の殘虐に復讐しなければならぬ、と言つてきたのである。……」

ヴォルテールの考へによれば、この偽瞞は、何人にとつても正義が何であるか、即ち、正義の觀念があまりに明瞭

であることに由來する。「正義と不正義とは、健康と病氣のごとく、何人にとつても明白であり、普遍的である。」したがつて、ヴォルテールにとつても、正と不正とは、それぞれの絶對性において對立するものではなく、たゞ健康が存在するやうに正義が存在するのである。それ故、もし病氣もまた何らかの仕方において人間に役立ち得るならば、同じ理由によつて、不正の存在もまた許される、といふ推論が可能になる。

特派員バブークは、兩軍の戦鬪が激化するに従ひ、戦争責任者が戦争目的のために遂行する最も非人間的な計畫や命令、味方戦鬪員の間に行はれる奪略殺害、血染れの負傷兵に加へられるむごたゞしい侮辱など、あらゆる戦争罪惡の證人となるのであるが、同時に、兩陣營の状況を公平に檢分するに及び、そこには崇高な勇氣や犠牲や寛大の美しい人間的事實が存在するばかりでなく、一度び戦争終結が決定されるや、敵味方を擧げて心からなる平和の讚美と人類の徳の祝福にすべてを献げてゐるのを知る。即ち病氣もまたより美しい健康に役立つてゐることを知るのである。

ヴォルテールは、この戦争レポートを書くために二頁も費してはゐない。フローベルの三百頁の「サラムボオ」をヴォルテールが三頁に縮めることは、極めてあり得ることのやうに考へられる。かうして重大な戦争のテーマを軽く通り抜ける彼は、おなじ軽さと速度をもつて次のテーマを潜り抜ける。ペルセポリスの古い入口から市街へ入らうとしたバブークは下層民の蔭慘不潔な生活からこの都市の印象批評をつくりあげようとしたが、都心へ近づくにつれて、整然たる文化の實態が展開するのを見る。

未熟な青年が高額の金で裁判官の職を買ひとるのを目撃して驚いたバブークは、やがて、金錢の手續によつて將校の地位についた軍人が身命を賭して祖國と皇帝のために戦ふごとく、金と良心とは互に犯し合ふことなく兩立するばかりでなく、むしろ、富裕な家庭に育ち、金錢の執着から解放された青年が眞實公平な裁判官たり得る事實を知る。様々な宗派に屬する修道院間の争ひや誹謗も、相互の牽制に役立ち、そのために名僧智識の輩出を妨げないことに

氣づく。

かくて、イチュリエルの特派員、即ちヴォルテールの使者であり、ヴォルテール自身に他ならないバブークの結論は、ルキ十五世の陪食に際し、「百科辭典」を辯護するために、二品の料理が出来不出来だからといつて、お食事を悉く窓から投げ捨てるには及びますまひ、といつたコアニ伯爵の言葉を、そのまま報告するだけである。たゞし、今度は料理ではない。バブークは、街の最も優れた彫像家に依頼して、貴金屬のなかに汚ない泥や石ころを混ぜた彫像を造らせ、これをイチュリエルの前に持参して言ふのである。——この美しい彫像がすべて黄金やダイヤモンドで出来上つてゐないからといふ理由で、打壊す必要がございませうか？——

これは、「百科辭典」辯護の完全な繰返しである。ファゲのいふ、百度も繰返されるヴォルテールの諧謔索引の項目となるべきものかもしれない。絶えずに打返す波のやうに、繰返しもまた思想の誠實さを現すものとすれば、ヴォルテールの誠實は正にこの繰返しの中にある。「哲学辭典」が小説に繰返されるのは、精神の繰返しである。表現の繰返しではない。われわれが最も怖れるのは、精神の繰返しが、同じ表現の繰返しとなることである。ヴォルテールの誠實を損ふ最大の缺陷もまたこゝにある。饒舌の精神は言葉を探す贅澤を知らない故に、その饒舌に間に合ふだけの精神の豊かさを持つに至らない。十八世紀文学の貧困はこの事實にほかならない。

「ザディグ」

この小説は、第一章の最初からわれわれの注意をひく。主人公は、他の殆どすべての小説の場合と同様、主人公の主人ヴォルテールが娑婆界へ送り出す青年派遣員であるが、名をザディグといひ、「彼は財に富み、年若く、熱情を制することができた。彼にはいかなる氣取もなかつた。つねに自己の正しさを主張しようなどとは考へず、人間の弱

點に對して寛大であつた。「生涯を熱情、才氣、迫害、鬭争、人氣、誹謗などの渦中に投じ、十八世紀の最も華かな檜舞臺の主人公であつた鬼才ヴォルテールの派遣員、即ち、つねに必ずヴォルテール自身であるべき小説の主人公が、およそ彼の親方とは似てもつかぬ寛大無私、善意にみちた青年として描かれてゐる。これは、どういふ意味だらうか？單なる酷評として見過すことのできないエミール・ファゲの「ヴォルテール」は「たしかに冷酷な人物ではなかつたが、そして、彼を尊敬する人に向つては、親切に施すことさへ惜まなかつたが、弱者に對しては苛酷であり、「くだらぬ輩」に對しては侮辱的であつた。オルレアン公がサン・シモンを評したごとく、ヴォルテールは、迫害が可能であつた場合には「執拗に」迫害した。彼は、彼に對して何をしたといふのでもないルウソオを追ひ廻した。殆ど信することのできない烈しきで罵倒し、宗教の敵として告發した。しかもその時の哀れなルウソオは、すでに至る所で追放者として扱はれ、追跡されてゐたのである。このルウソオに對して、「けがららしい反徒を徹底的に罰しなければならぬ」と叫んだのである。……彼は哲學者としての超越も、藝術家としての高揚も持つてはゐなかつた。目下の者で自分に諂はぬ人間を叩き碎くことしか考へなかつた。しかるに、自分より目上の者に向つては、名目を問はず、諂ふことしか考へなかつた。皇帝、皇后、王、殿下、大公、公爵、王の寵妾、たとへば、カトリーヌ女帝、マダム・ボンパドール、フレデリック二世、デュ・バリ伯夫人など。そして、この類の人々に獻げる讃辭だけはつねに用意され、この類の人々から戴く御親切は、たとへ一般的な性質にすぎないものであつても、有難く頂戴するのである。」

しかるに、ヴォルテールの分身たる無私公平にして寛大なるザディグは、「人々がバビロンの會話と呼ぶ徒らに騒しく無用意無意味で辻つまの合はぬ中傷誹謗などに、かつて侮辱をもつて報ひたことはなかつた。ザディグは、自尊心といふものが、空氣を詰めて膨らんだ風船のごときものであり、一寸でも刺せば、そこから嵐が吹き出すことを、

ゾロアストルから学んでゐた。……彼は寛大であり、恩知らずの者にまで親切であることを厭はなかつた。」
 かういふザディグのサロンに集るバピロンの知識人は、最も正直な氣取のない人として選ばれた客人であり、これらの客人たちを饗應するに際し、ザディグはサロンの愉しい会話が「機智エスプリを示さうとするあせり（それは、機智エスプリを持たない最も確實な證明である）のために損はれないようにした。」

ヴォルテールが機智エスプリを越えた誠實と熱情の所有者であることは、何よりも彼の生涯と、彼の精神の産物たる著述によつて明かである。機智を嫌ふ彼の言葉は、他の小説のなかにもしばしば見られる。しかし、巴里育ちのヴォルテールの誠實は、ジュネーヴの田舎者ルウソオに見られる非社交的な、誠實だけがその命であり、その誠實によつて狂氣となるやうな誠實ではなかつた。ルウソオの場合、誠實を護るために誠實以外の武器を使ふことができなかった。即ち、田舎者の誠實は、誠實を護るために誠實の武器しか持ち合せない無能な誠實であつて、舞臺においては、喜劇リヂイキユルに最も適した材料となるものである。ヴォルテールがルウソオを滑稽化することは、最も容易な業である。何故なら、ルウソオはその誠實の性質によつて、すでにそれ自身滑稽だからである。しかもヴォルテールは、彼の誠實を護る様々な武器を持つてゐた。機智と皮肉アイロニーである。そして「哲学辭典」は自分が書いたのではないといふ類の嘘をしばしば公言したり取消したりする狡猾さや用心深さまで備へてゐた。

皮肉は、弱者が強者の急所を突く力の精神的手段となるものであるが、自己と對象の充分な消化を経た後にはじめて、その鋭さと自由とを獲得するに至る。機智は、その軽やかな自發性と滑かさによつて機智となるものである。ヴォルテールの皮肉は、それが彼自身に向けられることを忘れず、また同時にそれが、社会と人間の運命に繋りを持つ點において、争ひ難い誠實を示してゐる。

たしかに、主人公ザディグは、およそヴォルテールの精神の分身として描かれてはゐない。しかるに、小説「ザディ

グーは、正にヴォルテール精神の分身である。ヴォルテールは、彼の精神とは對照的に見える主人公ザディグを描くことによつて少しも彼自身を欺いてはゐないのである。エミール・ファゲが、このやうな文学の祕密に觸れないのは不思議である。

しかも「ザディグ」は、極めて洗練された機智とアイロニーをもつて始まつてゐる。即ち、ザディグのごとき人物を配することによつてのみ可能である眞實のヴォルテールの表現として始つてゐる。ザディグは、彼が愛した最初の妻に裏切られ、二度目の妻に欺かれる。二度目の妻は、人間の鼻を切つて患部を擦れば癒るといふ戀人（ザディグの友人）の怪し氣な病氣と言葉を信じ、死んだふりをしたザディグの鼻を切り取らうとする。女人の情愛のはかなさを知つた彼は、獨りしづかに自然の研究に没頭する。

「神がわれわれの目の前に授けられた自然といふ偉大な書物を研究する哲學者ほど幸福な存在はあるまい。彼が発見する様々な眞理は眞に彼自身のものである。彼は自己の魂を養ひ育て、人間を怖れ氣遣ふ憂ひもない。」

このザディグが、ニュートンの紹介に熱中し、自ら研究所を建てたヴォルテールであることはいふまでもない。ただし、ザディグは言ふ、「なほかつ、哲學者の生活においては、最愛の妻が鼻を切りに來る心配もない」と。

たまたま森の中を散歩してゐたザディグは王の馬と王妃の牝犬を探しに來た侍従たちから盜人の嫌疑を受け、シベリヤ流刑を宣告されるが、事實の判明と彼の聰明な立證によつて罰金刑となり、さらに罰金免除となる。しかし、免除された四百兩の罰金のうち三百九十八兩を裁判費として檢事や廷丁に巻上げられる。殘額は召使たちが給料として請求する。この事に懲りたザディグは、一切の口言を慎しむのであるが、たまたま、一人の國事犯人が逃げるのを見たといふので金貨五百兩の罰金刑となる。

「餘り聰明であることは、時に、如何に危険なものであるか」を知つた彼は、

「あゝ神よ、王妃の牝犬と王の馬が通る森を散歩する人の哀れなるかな！ 窓に居て外を見ることの危きかな！ この世に幸福たることの如何に難きよ！」と叫ぶ。

「ザディグ」のこのやのに優れた調子が、この小説の根幹となり、最後まで巧みに配置されたならば、おそらく「キャンディド」に匹敵する珠玉の一篇となつたであらう。しかし、「ザディグ」は、進むにつれて、その暗さが地に着き、最初の垢抜けした知性の軽やかさを失つてゆく。たゞ、われわれがこの小説のなかで特に注意を惹かれる個所は、卑俗な實證主義を脱することができず、形而上学的なヴィジオンを致命的に缺いてゐたやうに考へられるヴァルテールが、次のやうな文章を綴つてゐることである。人生の悲運に打ちひしがれ、絶望の底に突落されたザディグは一人エジプトの方向へ道をとる。

「ザディグは空の星を頼りに道を歩いた。オリオンと輝くシリウスの星座が、彼をキャノプの港の方へ導いた。われわれの目には微かな火粉にしかすぎないこの光の廣漠たる世界に打たれ、大自然の中では目にもとまらぬ一點の微粒子に止るわれわれの地球が、人間の欲望の目には何か偉大で崇高なものやうに映つてゐることを考へた。そこで彼は、この一點の泥の微粒子の上で互に貪り殺し合つてゐる虫けらを、人類のありのままの姿として描いてみるのだつた。この想像は、彼自身の現在の虚無がそのままバビロンの虚無となり、同時に彼の様々な不幸を無にするやうに思はれた。彼の魂は無限の裡に飛翔し、感覺を離れ、宇宙の嚴然たる秩序を觀た。しかし、やがて、われに歸り、わが心の意識に觸れた瞬間、彼はアスタルテが自分のために死んだのではないかと考へた。宇宙の像は忽然と消え失せ、そこにはたゞ死に瀕したアスタルテと不幸なザディグの姿が見えるだけであつた。……」

これは何とパスカルの小説ではないか？ フアゲは答へるだらう、料理が全部出來の悪いとき、一品や二品特別不來な料理があるからといつて、悉く窓から投げ捨てるには及ばないだらう、と。

ヴォルテールにパスカルの黒い羽が大きく擴げられるのは「キヤンディッド」である。小説「ザディグ」は「そのまゝの世界」の特派員バブークの報告と異り、人間と人間社会にかゝる善惡の重大な疑問に終つてゐる。「何故人間の善は、かくも多くの惡によつてのみ得られるのか？」「何故神は、創造の企畫において苦惱の分量を減らさなかつたのか？」この疑問は「キヤンディッド」に至り愈々深く決定的な調子を帯びる。われわれの地球を微粒子と考へ、この微粒子上の人間を思ふことによつて不幸を忘れたといふザディクの觀想は、小説「ミクロメガ」に採用されてゐる。

「キヤンディッド」

搖ぎない名聲と財と王侯に勝る影響力を身に着けながら、デリスの館に穩かな老後を過してゐるヴォルテールの最も幸福な時期に書かれたこの小説ほど絶望的な文学は稀である。幸福に見えるものが生活の外貌だけであつたとすれば、彼の暗い思想の根底は何に由來してゐるのか？ いつ解けるとも知れぬ王室の不興や巴里への望郷心か、また十數年を共にしたシャトレ夫人の死、フレデリック二世との不和や幻滅、著作への迫害、人身攻撃、リスボンの地震、およそ彼の生涯を揺り亂した悲劇や災害のすべてが語るものであるか。作品と作者の生活とがいかに離れ難い祕密な糸に結ばれてゐるにせよ、それは、作品の價値とは別な問題である。

「キヤンディッド」が傑作と稱せられるのは、まづ、文體の均整である。文章の簡潔と表現速度の軽い進行が稀薄な隙間をつくらず、全體として一種の重みを持つほど緊密に調合され、壓縮されてゐる。自由が抑へられずに自ら節度を保つてゐる名人藝であつて、正に古典の名に價するものであらう。しかも、この作品は、文学を専門とする作者の文学的野心によつて書かれたものではない。七十歳を過ぎたヴォルテールはすでに名聲と行跡の頂天に座つてゐる。

た。のみならず、彼の不死身の活力と眠りを知らぬ知性が、つねに何らかの残された希望に結ばれてゐたにせよ、それは一篇の小品「キヤンディッド」ではなかつたであらう。彼は巴里に歸還した際の群集の熱狂と「イレエヌ」上演にともなふ嵐のやうな人氣のなかで死んだのである。民衆が迎へたのはカラ事件のヴォルテールである。萬雷の拍手と感動のなかに皇妃やアルトア伯が臨席したのはコメデイ・フランゼーズの「イレエヌ」である。群衆の或る者は「ピュセル」のヴォルテールに萬歳を送つた。しかし、これらの熱狂も拍手も叫びも演劇も完全に時のなかに消え、今日残つてゐるのがこの小さな「キヤンディッド」である。眞暗な、黒い寶石のやうな「キヤンディッド」である。このなかに、實存主義者の文学作品にも見られないほど多くの人生の悲惨と不條理が壓縮され、詰め込まれてゐる。どんな實存主義者も同意を餘儀なくされるほど希望の道が絶たれてゐる。またどんな實存主義者も承認すべき空間と時間の任意な無視がおこなはれてゐる。この小説に現れる人間の行動は、オランダ、ポルトガル、アメリカ、英國、フランス、トルコ、南米など、至る所に奇怪な足跡を残し、近代文明のどんな手段も及ばぬ自由を證明してゐる。のみならず、彼らは十八世紀のリスボンにゐた後に、夢の理想郷エルドラドを旅行したり、アメリカの蕃人部落に姿を現し、巴里やヴェニスにも滞在する。かういふ小説形成が哲学とは何の関係もなく、むしろ當時のありふれた小説概念によるものであつたとしても、ヴォルテールが最もよく彼の思想をこの形式によつて生かし得た事實は、藝術の手段が、すべて、窮極的には、作者の精神に征服される従順さを持ち、その時はじめて、作者の自由が生れ、藝術の獨立が成立することを證してゐる。そしてこの藝術の自由と獨立は、手段の古さや新しさを越えて、自己の生命を保つものである。パスカルを攻撃したヴォルテールが、パスカル以上にパスカル的思想をこの小説に生かしたことについて、彼の思想生活の矛盾を指摘することは、思想の誠實といふものが何であるかを理解する者にとつては、殆ど意味を持たな

パスカルが描く人間の悲慘は、その悲慘の救済が果さるべきものとして存在する。人間の弱さは、同時にその偉大さによつて支へられてゐる。「キヤンディッド」の人間悲慘は、たゞ悲慘に終始するばかりでなく、笑ふことのできな
い笑や、狂氣の眞實や、戯畫の嚴肅さなど、人間惡の一切が、最後まで、皮肉の伴奏に躍り流されてゆく。この作品
がわれわれを驚かせるのは、重大な主題が輕快に扱はれてゐることではなく、その輕やかさによつて、主題の重み
と、作者の誠實とが、すこしも輕減されないばかりか、むしろそのために、作者の精神經歷の確實さが窺はれ、作品
の效果目的が一層よく達成されてゐることである。哲学教師パンダロスは、彼の弟子キヤンディッドに、次のやうな樂
天主義を教へてゐる。

「物事はすべて、それが存在してゐるやうにしか存在してゐない。なぜかといへば、萬物はすべて各自の目的に應
じて創られてゐる故、すべて必然的に、最善の目的のために創られてゐる。たとへば、鼻は眼鏡をかけるために創ら
れてゐる。それ故、われわれは眼鏡といふものを持つてゐる。石は切石として切られ、館を建てるため創られた故、
貴殿はかくも立派なお館を持つてをられる。かくして豚は食べられるために創られ、われわれは一年中豚を食べるこ
とができる。したがつて、萬物はすべて善し、と言つた人々は、馬鹿なことを言つたもので、萬物は最も善く存在す
る、と言ふべきであつた。」

パンダロスのこのドンキホーテ的樂天主義は、人生のいかに殘虐な試練によつても變らない。絞首刑になつて死に
損じた時にも變らない。おそらく目を抜かれ、脚を切られても變らないであらう。

「キヤンディッド」は、このオプチミスムを裏切る人間惡の最惡の資料を選び、特にジエズイット僧の不潔殘虐な
肉慾を描くことを忘れずに、構成されたものである。したがつて、パンダロスの樂天主義は、世界惡の存在を一層顯
著なものにするための照明燈であり、その教へを受けた弟子キヤンディッド（無邪氣の意味）が、つねに、事毎に、最

も悲惨に、最も滑稽に裏切られてゆく過程を描いたものである。

しかし、ヴォルテールは、パングロスのオプチミスムを、小説構成の方法として使用したにすぎないのだろうか。パングロスの思想はヴォルテール自身の思想ではなかつたか。

「この世界には、悪よりも遙に多くの善がある。……われわれがつねに天に向つて訴へる不平は、人間が自己の不満をもちたことの中に秘かな喜びを感じるあの性質に由来してゐる。人間は彼らが享受する幸福よりも、彼らが打たれる不幸を一層強く感ずるものである。悲惨な事件に満ちた歴史は、善よりも悪が比較にならぬほど多いといふ考へ方を有利に導く。しかし、人々は歴史といふものが、王や民族の闘争を描く大事件だけを取扱つてゐる事實を忘れてゐる。歴史は人間の一般的な常態を扱つてはゐない。この一般的な常態が、社会の秩序であり、平安である。」

(Examen des oeuvres de mauPertuis)

かういふオプチミスムは、自由や社会主義や善悪に関するヴォルテールの相對主義として、矛盾する様々な形をとりながら現れてゐるものである。

また、キャンディッドを欺き翻弄する人間社会の諸悪は、ヴォルテール自身の人生経験を如實に語つてゐるものである。

悪魔の力は神と同様に強く、それ故神は悪魔の支配をそのまま放任してゐる、といふ考への爲に迫害されたマルタンも、ヴォルテールの思想の一つである。即ち、幾人かのヴォルテールが一つの暗い河「キャンディッド」の文学に融け合ひ、流れてゐるのであつて、われわれは、思想の探索や分析によつて、この小説の持つ音色をとり逃してはならない。ヴォルテールの思想が至る所で矛盾してゐることを指摘したファゲの有名な言葉「明哲なる思想の渾沌」も、文学の世界では通用しない。